

研究ノート

# 「総合的な探究の時間」を生かす高校カリキュラム・マネジメントの視点と方法

—— M 高等学校での探究的な実践の吟味を通して ——

胤森 裕暢\*・福山 亮\*\*・内門 裕貴\*\*\*・田中 智大\*\*\*\*

## 要 旨

各高等学校はカリキュラム・マネジメントを実現することが求められ、その必要性も明らかである。教科等の横断、授業実践の評価・改善、地域との連携・協働を進めるために本稿では、「総合的な探究の時間」を生かし教師達が自ら授業やカリキュラムを改善・開発してゆく探究的な取組が有意義であることを、実践された事例の吟味を通して明らかにしてゆく。

キーワード：探究、総合的な探究の時間、校内研修、全体計画と別業、探究発表会とルーブリック

## 1. はじめに一求められる高校のカリキュラム・マネジメント

### 1.1 なぜ高校のカリキュラムを改善するのか

これから日本社会が「厳しい挑戦の時代」、「予測困難な時代」を迎えるとされ、市民一人一人が新たな価値を生むよう期待される中（『高等学校学習指導要領（平成30年告示）解説 総合的な探究の時間編』学校図書、平成31年、p. 1、以下ページのみは同書）、高等学校（以下、高校）の学習指導要領は、「生きる力」を捉え直しながら、「生徒が未来社会を切り拓くための資質・能力を一層確実に育成すること」を目指し、「社会に開かれた教育課程」の実現を重視することとした（pp. 2-3）。

この「社会に開かれた教育課程」は、どのような学習内容を生徒が学び、どのような資質・能力を身に付けるか各校で明らかにし、社会と連携・協働し、それを実現していくことを意味する（p. 6）。

また、国として求める教育を実現してゆくため、「よりよい学校教育を通じてよりよい社会を創る」という目標を社会と共有するという意味も含んでいる（p. 6）。

もとより我が国における教育課程（すなわちカリキュラム）は、学校の教育活動を支える基盤とされ、「学校運営全体の中核」とされるが（p. 46）、これからのカリキュラムはより大きな、「学びの地図」としての役割を果たすことまで期待されていると考えられる（pp. 1-2）。

こうしたカリキュラムを各校が充実させるために文部科学省は、「校長の方針の下に、校務分掌に

---

\* 広島経済大学教養教育部教授

\*\* 広島市教育委員会学校教育部指導第二課指導主事

\*\*\* 広島市立美鈴が丘高等学校教諭

\*\*\*\* 広島市立美鈴が丘高等学校教諭

基づき教職員が適切に役割を分担しつつ、相互に連携しながら、各学校の特色を生かしたカリキュラム・マネジメントを行う」よう求めている (p. 46)。このカリキュラム・マネジメントについては、高校で校内研修等を通して進めるよう、学習指導要領の第1章の総則の構成を大幅に見直した程の意図があり (p. 8上)、育成を目指す資質・能力を三つの柱で整理したことと共に今改訂の「主な改善事項」となっており、改訂全体の理念にも深く関わる (p. 8下)。

なお、「学校教育に関わる様々な取組を、教育課程を中心に据えながら組織的かつ計画的に実施・評価し、教育活動の質の向上につなげていくこと」であるとも説明される (p. 45中)。

ではこれから的高校現場は、資質・能力を育てるために、いかに自校のカリキュラム (教育課程) を改善していけばよいのだろう。

## 1.2 カリキュラム・マネジメントとは

そこで、これから高校が「開かれた教育課程」を通じて、その充実をさせてゆくため掲げられたカリキュラム・マネジメントとは何か整理しておく。「解説」からやや長い引用をすればそれは、各校において、「生徒や学校、地域の実態を適切に把握し、教育の目的や目標の実現に必要な教育の内容等を教科等横断的な視点で組み立てていくこと、教育課程の実施状況を評価してその改善を図っていくこと、教育課程の実施に必要な人的又は物的な体制を確保するとともにその改善を図っていくこと」などを通して、教育課程に基づき組織的かつ計画的に各学校の教育活動の質の向上を図っていくこと」とされる (p. 5上)。

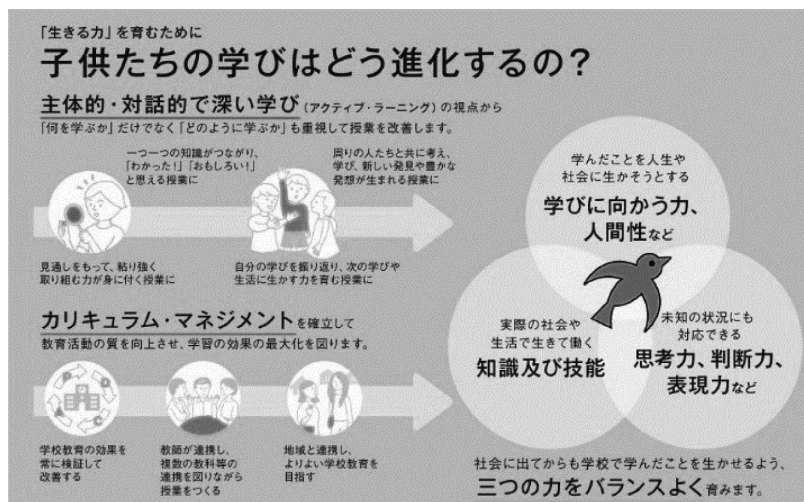
田村は、このカリキュラム・マネジメントの特徴を「三側面」(田村 (2022), p. 3) あると捉えている。それはまず、「教育の目的や目標の実現に必要な教育の内容等を教科等横断的な視点で組み立てていくこと」(p. 5上) である。これは「生きる力」の育成という教育の目標を具体化した、「何ができるようになるか」という資質・能力の育成をねらい、生徒が「何を学ぶか」という教育の内容を選択、組織していく、「内容相互の関連を図りながら指導計画を作成」するなどして、各授業時数を定めていくこと、「教科等間のつながりを意識して教育課程を編成すること」等である (p. 47)。

次に、「教育課程の実施状況を評価してその改善を図っていくこと」(p. 5上) である。各種の調査結果等を活用して、生徒そして学校、地域の実態を把握しながら、自校の課題を見だし、改善していくよう求められ、これを学校評価と関連付け実施することである (pp. 47, 169-171)。

そして、「教育課程の実施に必要な人的又は物的な体制を確保するとともにその改善を図っていくこと」(p. 5上) である。これは、とりわけ多様であると考え得る各高校の実態を踏まえ、総合的な力を発揮していくよう、「その際、特に、教師の指導力、教材・教具の整備状況、地域教育資源や学習環境 (近隣の学校や大学、研究機関、社会教育施設、生徒の学習に協力することのできる人材等) などについて客観的かつ具体的に把握して、教育課程の編成に生かすこと」、またその改善を図ることである (p. 48上)。

このとき、「各教職員がそれぞれの分担に応じて教育課程に関する研究を重ね、創意工夫を加えて編成や改善を図っていくこと」、学校運営協議会制度等を推進し、地域の重要な存在として、目標を共有し、「地域とともにある学校づくり」を一層効果的に進めることもある (p. 48)。

このカリキュラム・マネジメントについて文部科学省は、既述した「三側面」を含め、図1のリーフレットのように保護者、市民に向けても明示し、国を挙げ、学校のカリキュラム改善を進めようと



出所：文部科学省 HP (<https://www.mext.go.jp/>, 2024年4月14日確認)

図1 【中学校の保護者の方へ】リーフレット（ダイジェスト版）

していると理解できる。さらに国は、学校の改善を市民と進めるなか、「よりよい学校教育を通してよりよい社会を創るという理念を学校と社会とが共有すること」も期待しているのである（p. 6）。

これらから、国の求めるカリキュラム・マネジメントの特徴を探ると次の3点が考えられる。

- ① よりよい社会を創ることを念頭に各高校では、保護者や地域等に対してカリキュラムをよく開き、市民の参画を得つつ、教職員たちが主体となって、改善を進めることが求められている。すなわち、高校現場からの主体的で開かれたカリキュラム改善が期待されている。
- ② このために、これまでの教育課程編成の考え方（教育課程経営）をふまえ、複数の教科等と連携する、学校運営協議会等を生かし地域と連携する、学校評価とよく関連付けるという、これまでも説かれてきたことが強調されている。
- ③ 特に手立てとして、自校としての目標及び資質・能力の設定と指導計画と評価とを一体的に進めることが求められている。

これらの特徴をもつと考えられるカリキュラム・マネジメントを高校現場が実践する際、どのような視点と方法が求められているのかを明らかにすることは、カリキュラム・マネジメントを画餅に終わらせず、すぐれた教育課程の経営として実践してゆく上で肝要と考えられる。

この実践の中心は少なくとも、その学校の教師であり、彼らが主体的に自らの授業や自校のカリキュラムを開いて改善していくことと考えられる。なぜならカリキュラムをリアルに改善してゆくのは先ず、それを自らのこととして、責任を持って行う教師だからである。そしてこれらの取組は、まさに教師が探究的な教育活動をするということと捉えることもできるのではないか。

### 1.3 研究の目的と方法

ここまでの考察をふまえ本稿では、教師たちが、高校現場でカリキュラム・マネジメントを実践してゆくための視点や具体的な方法を明らかにしてゆきたい。

このために「探究」をキーワードにしながら、①教師たちが実践する視点として「探究」的なアプ

ローチが考え得るかを整理しておく。②この「探究」的なアプローチには、どのような具体的な方法が効果的かを考えるために、筆者らが「総合的な探究の時間」を要に取り組んできた普通科高校のカリキュラムづくりの実践を吟味し、特長と課題を明らかにしてゆく。③これらにより、カリキュラム・マネジメントを高校で実践してゆくための視点と方法について明らかにしてゆきたい。

## 2. 高校でカリキュラム・マネジメントを実践する基本的な視点と方法―「探究」―

これまでみてきたように、教育課程経営をカリキュラム・マネジメントとして充実させようとする現実的で本質的な理由には、市民一人一人が新たな価値を生めるよう、「厳しい挑戦の時代」、「予測困難な時代」を迎える社会を拓いてゆけるようにすることがあった。ならば生徒が、予測困難な社会にあえて挑戦しながら新しい価値を生む、その手応えをつかむような学習、カリキュラムを用意する必要があるだろう。なぜなら価値の創造は、実際に挑戦してみなければ理解が進まないし、手応えが得られなければ身につかないと考えられるからである。

ではこのために高校と教師たちは、どのような授業やカリキュラムをつくらないといけないのか。これに対し中央教育審議会の答申を経て新学習指導要領は、人間としての自らの在り方生き方とよく関わらせながら「問題解決的な学習が発展的に繰り返されていく」ことである「探究」という学習のあり方を明示している（pp. 9, 12-14, 79）。これはこれからの市民だれにも期待される、自らの世界観・人生観などによりながら研究を続ける姿と考えることもできよう。

こうした考察から、教師たちがカリキュラム・マネジメントを実践する上では、「探究」を自校のカリキュラムと授業に実現する必要があると考えられる。また成年年齢の引き下げなど、政治や社会が生徒に一層身近になるなか、高校には、「生涯にわたって探究を深める未来の創り手として送り出していくことが、これまで以上に重要」（pp. 3-4）とされており、未来を創る市民となるために、高校生が探究を深め続けられるようにすることが重要とする。このような力は、生徒たちに、よりよい探究活動を繰り返し経験させることで育成できよう。

従って高校現場と教師たちは、生徒たちがよい探究活動が続けられるよう、授業改善したり、カリキュラムを改善し、開発や創造したりしてゆくことが肝要と考えられる。なぜなら、従前の教科授業とカリキュラムを越え出るような実践が求められるからである。

このように考えると教師たち自身が、カリキュラムの改善・開発を、いわば探究的行わねばならないとも考えられよう。なぜなら、今や教師たちに求められているのは、「単に批判的に議論を続けることや客観的に研究すること」でなく、その責任と意欲とにより、日々の授業とカリキュラム実践を通しながら、自校と抱える生徒のための新たな探究的授業とカリキュラムを生み出してゆくことであり、それは自らの実践を探究することと考えられるからである（胤森・川口（2023），p. 3）。

教師たちが自らの責任と意欲とによる探究をすることなしに、生徒たちに、在り方生き方までも問いつける質の高い探究を続けさせるのは困難になると考えられるからである。

教師たちは今後一層、学習指導要領を基準に、教科書や教育学の研究成果を生かしつつ、自らの授業とカリキュラムを探究的につくり出していくことを求められると考えられる。それは、自らの実践を吟味し改善しながら開発してゆく、主体的、連続的、発展的な授業研究に取り組むことであり、実践的であるだけでなく探究的な取組と考えられる（胤森・川口（2023），p. 3）。ただし教師たちは、従前の授業実践と並行して新しいカリキュラムをつくり出すことになり技術的、時間的な困難が伴う



と考えられる。

別の方からみると、高校で教師たちが探究的に自校のカリキュラムをつくり出していく具体的実践的な方法として、カリキュラム・マネジメントが示されたようにも捉え得る。ただし整理してきた通り、学習指導要領とその解説には、教師たちが探究する重要性について特に説明はされていない。

では高校現場の教師たちはいかに探究的に、自らの探究的なカリキュラムをつくり出してゆけば良いのか。すなわち、自校の授業とカリキュラムを、探究のプロセス（p. 6）を発展的に繰り返してゆく、「質の高い探究の過程」（p. 132）を組み込んだものへと、いかに具体的に改善し開発していけばよいのか。このことを考えるために以下では、我々が参画し、好事例と考え得る高校実践を整理し、特長と課題について吟味してゆく。

### 3. 高校における探究的なカリキュラム・マネジメント実践の特徴

#### 3.1 M 高校（全日制普通科）の課題

令和5年度に我々が教諭や担当指導主事、コーディネーターとして関与したのは、H 市立 M 高校（全日制普通科）である。生徒急増期の昭和63年4月、新興 M 団地内に開校した（団地内の M 小学校と M 中学校は、団地の主要道路を挟んで隣接している。）。

M 高校は平成13年に、同校普通科内に国際理数コースを新設したが、平成21年に改訂された高等学校学習指導要領で理数教育の充実が図られたこと等を受け、平成24年に同コースの募集を停止し、令和5年現在まで至る。

H 市立の全日制普通科の高校（全4校）は M 高校以外、コースを有しており、社会の変化に対応した教育課程編成や地域に開かれた教育活動を進め、特色化を図ってきた。これらに対し M 高校はコース等を持たず、特色化しにくい状態が続き、学科改編等が課題となってきた。

こうした中で M 高校は、平成27年度から H 市の指定校として、特に主体的・対話的で深い学びの実現と「総合的な探究の時間」の改善に取り組み、生徒主体の協同学習や地域の課題や魅力に着目させる探究活動の工夫に取り組んできた。

ただし近年、M 団地内の児童生徒数は減少し、近隣の私立高校の特色化や魅力化等もあり、M 高校の志願倍率は1.04倍（令和5年度入試）で、過去最低であった。

これらを受け M 高校は、中学生及び保護者、中学校等に広く、自校の教育活動の魅力をよく伝える取組が緊要となってきた。

#### 3.2 M 高校の校内組織

こうした、教育活動の魅力化等の課題に取り組む同校の校内組織として次のものがあげられる。

- ① 未来会議：週1回程度開催。主幹教諭、未来委員長（教育研究主任、本稿共著者）、未来委員（3名、内1名は教育研究部、本稿共著者）、生徒代表（必要に応じて参加、2名）で構成される。ただし、H 市の M 高校担当指導主事（以下、担当指導主事、本稿共著者）とカリキュラム・コーディネーター（兼学校運営協議会委員長、大学教師、本稿共著者）も適宜出席し協議に参加。「未来会議室」を常設し、委員とカリキュラム・コーディネーターの机・椅子を用意。

主に同校の学科を改編する事業の実施主体として、同校の教育目標や今後育成する資質・能力、それに基づく事業計画案を作成し、拡大未来会議に提案する。また、コンソーシアムやコーディ

- ネーターとの連携窓口となり、適宜意見交換を行い、取組の計画、検証、見直しを行っている。
- ② 拡大未来会議：月1回程度開催。未来委員長他未来委員、管理職と担当指導主事、関係分掌の主任等で構成される。適宜カリキュラム・コーディネーターも出席し協議に参加。未来会議の検討状況や提案内容を把握し管理する。
  - ③ 教育研究部（特に「総合的な探究の時間」運営担当者、内1名は未来委員を兼務）：「総合的な探究の時間」の計画と実施、授業観察月間など授業改善に係る研修を担当する。
  - ④ 総務部（の特に広報担当者）：この組織は、学科の改編に関する広報、ホームページ全般の保守・管理を行う。
  - ⑤ コンソーシアム：年3回開催。地元大学関係者2名（1名は学校運営協議会委員長、1名は委員）、地域関係者2名（M 団地公民館長と区役所地域おこし推進課長、2名とも学校運営協議会委員）、地域企業関係者（同窓生）1名、保護者代表1名、生徒代表2名を招集。委員である学校運営協議会委員長はカリキュラム・コーディネーターにも配置され、未来会議等に参画する。
- これまで学校評価等を担ってきた学校運営協議会を整備充実させている。なお別に、学校運営協議会は残している。
- 未来会議を窓口として、M 高校と定期的に意見交換している。学校経営計画（特に学校評価）の評価項目に、学科改編に係る検討の状況を設ける等して魅力化の事業について、管理する。
- ⑥ 運営指導委員会：年3回開催。地元大学関係者3名、他県教育委員会職員、H 市教育委員会部長を招集。事業主体である学校及び管理機関である H 市教育委員会に指導助言を行う。M 高校から事業計画の進捗状況についてヒヤリングを行い、その成果と課題について指導助言を行う。

### 3.3 M 高校の校内研修

#### 3.3.1 資質・能力研修（令和5年5月12日（金）放課後）

本研修は、M 高校の教職員を対象に、学校教育目標に基づいて策定された新学科で育成を目指す資質・能力について具体化し共有化するため行われた。

新しいカリキュラムと学科の新設に向け育成を目指す、「国際平和文化都市『広島』をフィールドとした学びにより地域社会の発展に貢献し続ける人物」に必要な資質・能力について未来会議から、先ず、①地域や社会の課題を見出す力、②正解のない課題に向き合い続ける力、③協同して課題解決する力の3分野に分けられること、それぞれの分野はさらに、①情報収集力・情報析力・発信力、②自分力・思考力・行動力、③調整力・連携力・実践力の9つの資質・能力に細分化できることが説明された。

続いて、この9つの資質・能力から連想できる M 高校の生徒の具体的な姿や力を、参加者が電子黒板に書き出し共有した。

研修後には、共有された内容を、未来会議が、AI テキストマイニングを用いて分析する（図2）等して、M 高校が育成を目指す各資質・能力について整理を進めた。

具体化した資質・能力をレベル分けし、標準レベル（レベル A）、発展レベル（レベル S）としてレベル分けしてループリク化した。

評価しやすいようにチェックボックスも付けられた（表1）。

こうして未来会議では、令和5年度中に、「新学科で育成を目指す資質・能力の具体」を学校内と、

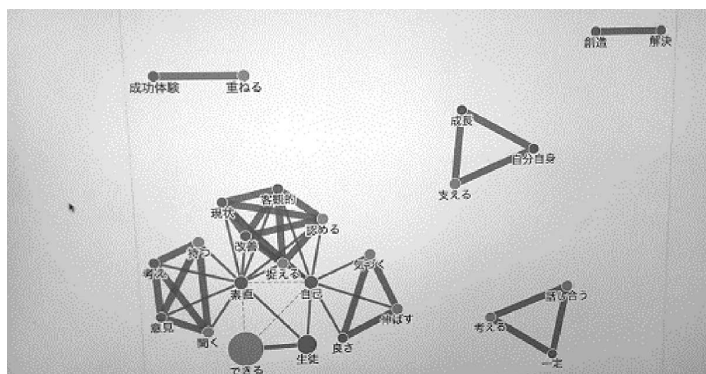


図2 AI テキストマイニングされた資質・能力

表1 具体化した資質・能力のルーブリック

2023/08/18

令和5年度 M 高等学校 育成を目指す9つの資質・能力のルーブリック

主要 3分野	9つの 力	「国際平和文化都市『広島』をフィールドとした学びにより地域社会の発展に貢献し続ける生徒」	
		レベル A	レベル S
地域や社会の課題を見出す力	情報収集力	<input type="checkbox"/> 他者の意見を傾聴することができる。 <input type="checkbox"/> インターネットや書籍を活用して情報を収集できる。	<input type="checkbox"/> 情報を多角的に捉えることができる。 <input type="checkbox"/> 専門家や論文を活用して情報を収集できる。
	情報分析力	<input type="checkbox"/> 複数の情報を比較することができる。	<input type="checkbox"/> 複数の情報の変化をみることができる。 <input type="checkbox"/> 複数の情報を分類することができる。
	発信力	<input type="checkbox"/> 地域の行事や課題、社会問題に興味を持つことができる。 <input type="checkbox"/> 考えや意見を、相手に伝えることができる。 <input type="checkbox"/> 外部に情報を発信することができる。	<input type="checkbox"/> 考えや意見を相手に応じて適切に伝えられるように工夫することができる。 <input type="checkbox"/> 新聞や SNS、インターネットを効果的に使って、外部に発信できる。
正解のない課題に向き合い続ける力	自省力	<input type="checkbox"/> 現状を受け入れ自己を改善しようとする姿勢がある。 <input type="checkbox"/> 継続的に自己を高めようとする。	<input type="checkbox"/> 自己の良さの気づいてそれを磨き上げることができる。 <input type="checkbox"/> 自分の考えを持ちながら、他者の意見を聞き現状を受け入れられる。
	思考力	<input type="checkbox"/> データや経験をもとに多角的に課題を捉えることができる。 <input type="checkbox"/> 論理的に結論を導こうとしている。	<input type="checkbox"/> 仮説を立てた上で検証を繰り返すことができる。 <input type="checkbox"/> 論理的に結論を導くことができる。
	行動力	<input type="checkbox"/> 実現に向けた計画を立てることができる。 <input type="checkbox"/> 目標を設定し、行動することができる。	<input type="checkbox"/> 目標達成のための計画に粘り強く取り組むことができる。 <input type="checkbox"/> 立てた計画に基づいてより良い成果を出すために試行錯誤することができる。
協同して課題を解決する力	調整力	<input type="checkbox"/> 引き受けた仕事に責任感を持つことができる。 <input type="checkbox"/> 周囲と仕事の分担やスケジュールを調整しようとしている。	<input type="checkbox"/> 他者の意見を中立的に聞き入れ、多様な関係性や状況を踏まえることができる。 <input type="checkbox"/> 周囲と仕事の分担やスケジュールを調整し、粘り強く課題に取り組むことができる。
	連携力	<input type="checkbox"/> 他者と意見を交換しようとしている。 <input type="checkbox"/> 目標を達成するために協力し、行動することができる。	<input type="checkbox"/> 他者の意見や気持ちを受容し理解することができる。 <input type="checkbox"/> 自分の意見を他者と共有したり、積極的に質問することができる。 <input type="checkbox"/> 複数の目標を達成するために協力し、合意形成しながら行動することができる。
	実践力	<input type="checkbox"/> 与えられた課題に取り組むことができる。 <input type="checkbox"/> 指導されたことを理解し、動くことができる。	<input type="checkbox"/> 自ら課題を設定し取り組むことができる。 <input type="checkbox"/> 指導されたことを理解し、発展的に考えながら動くことができる。

授業公開 2年生 保健体育「保健」 9～12月は授業観察期間です。教員全員が授業を公開し、互いに観察して実践力を高めます。今年度のテーマは「育成する資質能力の明確化」と「生徒が問いを持つための工夫」です。2年生の保健の授業です。学習内容は健康的な職業生活で、職場がおこなう健康増進対策について考えました。労働や職業といってもなかなかイメージしづらいものですが、一番身近な「先生（教師）」を対象にして課題の発見と解決策を提案する授業でした。『どうしたら、先生たちをもっと余暇を活用できるようになるのか？』放課後の指導や部活動のあり方など、自分たちがイメージしやすい内容から課題を見いだしていました。その後、タブレット端末による情報検索や仲間との対話を通して具体的な解決策を考えました。

生徒は自分ごととして課題に向き合っていました。

生徒の情報収集力、発信力、思考力、連携力の育成を目指した授業でした。



図3 HPで紹介された授業観察月間の授業公開の様子

関係機関とに示したが、未だ教職員と生徒に充分、共有されたとはいえ難いと考えた。また新カリキュラムのどの場面でどの資質・能力を育てるか、評価をどのように効果的に行うかなどの課題もあるとされた。

それでも未来会議では、縦割りのような教科目の枠組みによる実践が続いた自校の授業が、研修を通して、教師たちが自ら考え出した資質・能力の枠組みにより再整理でき、これを共通言語に教師と生徒、さらに学校関係者がコミュニケーションを図り教育活動を推進する基盤を生み出すことができたと考えられた。ここから、続く令和6年度には、次の2つを展開することが目指された。

1つ目は「グローバル探究科で育成を目指す資質・能力の改善・特色化」を進めることである。明らかにした9つの資質・能力には、定義の被っているものが見受けられ、数も多く、資質・能力の共有化の障壁となる面があるとされる。この解決のため、自校で育成を目指す資質・能力を再考し、併合するなどして、新たに資質・能力を定義づけることも考えられている。また新学科（グローバル探究科、当時仮称）として、特に育てたい資質・能力を見いだし特色化することも目指している。

2つ目は、創り出すカリキュラムに「グローバル探究科で育成を目指す資質・能力」を活用することである。各教科・科目、総合的な探究の時間、特別活動（特に学校行事）の全ての授業とカリキュラムに、「グローバル探究科で育成を目指す資質・能力」を意識化や仕組むことが必要と考えられている。特に「総合的な探究の時間」や学校行事には、決まった「評価軸」がないため、担当者により指導の目的や目標に幅が生じた。教育活動が一貫性を保ちながら実施できるよう、「グローバル探究科で育成を目指す資質・能力」を意識することが役立つと考えられている。

### 3.3.2 協同学習と探究的な学びへの授業改善

① 授業改善の方向性の共有化 同校は令和元年度から「協同学習の理論に基づいた授業改善」に取り組んできた。続く今年度から「探究的な学習への授業改善」を打ち出したことで、つながりが不明瞭と捉えられることが危惧された。これに対し未来会議では、これまでと今年度からの方向性は別でなく、むしろ強く関連し合っていることを示す「学び方のイメージ図」が用意され、研修等で示し説明して、その共有化が図られた（図3）。

この共有化には次の2つの意義があると考えられる。一つは、3年間を見据えた授業改善の計



画を示した点である。これまで本校では、年度毎にその都度授業改善の重点目標を設定していた。しかし今年度からは、令和5年度、令和6年度、令和7年度それぞれの授業改善における重点目標をあらかじめ明示することにより、授業改善のいわば「ストーリー」を描くことを意図した。これにより、授業改善担当教員に誰が就いても、安定した授業改善が可能になると思われる。もう一つは、授業改善の重点目標と「新しい学科で育成すべき9つの資質能力」を関連付けた点である。具体的には、令和5年度における授業改善の重点目標である「問いを持って授業に臨む」は、「新しい学科で育成すべき9つの資質能力」において「地域や社会の課題を見出す力」の育成に関わる。同様に令和6年度の「他者視点を育みながら、自ら学び取る」という重点目標は、9つの資質能力では「協同して課題を解決する力」に該当する。このように、授業改善の重点目標と「新しい学科で育成すべき9つの資質能力」を関連付けることにより、授業改善が普通科改革事業により密接に位置づけることができた。

- ② 授業改善研修による授業改善の重点目標の共有と現状把握 「授業改善の方向性」を共有化する中、令和5年度の授業改善の重点目標（生徒が「問いを持って授業に臨む」こと）を設定した。問いを持たせることは、これまで研修してきた協同学習の重要な要素であり、探究の過程の「課題発見」として、さらに本校で育成を目指すことになった「新しい学科で育成すべき9つの資質能力」の「地域や社会の課題を見出す力」とも関わり重要と考えた。この目標を全教員が共有するため6月9日に行われた授業改善研修では、「問いを持って授業に臨む」という重点目標を確実に共有するため「質問」、「発問」、「問い」の違いを理解するワークショップも行い、生徒も教員も答えを知らない疑問を「問い」と呼ぶこととなった。またワークショップを通じて、地理歴史科や公民科、保健体育科のように問いを立てやすいと考える教科目と、英語科や数学科のように問いを立てにくいと考える教科目があることがわかった。この研修の最後に実施した、現状把握のための教員アンケート結果からは、「生徒が自ら問いを立てるような具体的な取組みや工夫をどの程度実施していますか」という項目に対し、「特に意識して取組みや工夫をすることはない」との回答が55.3%であったことが注目された。約半分の教員が「生徒の問い」から授業をはじめていない現状が読み取られた。

- ③ 授業観察月間の実施 このような現状を意識して全教師で授業改善を進めるため、2学期の9月1日～12月22日の間、教員が相互に授業を観察し合う「授業観察月間」を設け実施し、HPで詳細に紹介もした（図3）。

この期間には、授業者が簡易的な指導案を作成しておいて、職員朝礼で授業を実施する日時を周知してから、都合の良い教員が自発的に観察した。

観察した教員は、「授業観察カード」に記入し、授業者へフィードバックした。特に以下の2点を工夫した。第一は、簡易的な指導案に「新しい学科で育成すべき9つの資質能力」のどの資質能力を育成しようとしているかを示すようにした。第二は、「授業観察カード」に、観察した授業は「新しい学科で育成すべき9つの資質能力のうち、どの資質能力が育っていると思いますか」という項目を付け、授業観察者も評価できるようにしたことである。

授業者が想定した資質能力と、観察者が見取った資質能力とに違いがあれば、それこそが授業者と観察者の新しい視点になることも期待された。この期間内に実施された授業は（全教員47名中25名が実施）、問いを中心に展開された。具体的な各授業の問い（抜粋）は次表の通りだった（表2）。

表2 授業観察月間に設定され実施された「問い」(抜粋)

教科等	問いの内容
保健	どうすれば学校の先生の働き方が改善されるか。
日本史探究	奈良時代に目指された律令国家の「理想像」とはどのようなものか。
国語	『徒然草』の作者 兼好法師が伝えたかったこととは何か。～「丹波に出雲といふ所あり」に似た他の段を読み比べて読み取る。～
音楽	表現主義の作曲家は、どのように音楽で狂気を表現したのか。
数学	平均値が同じ場合、それらの「データ」は本当に「同じ」なのか。
国語	あなたが豊太郎ならばどう行動したか。(題材：森鷗外『舞姫』)
数学	正多面体は、我々の生活の中にどのように活用されているのか。
英語	修学旅行の思い出を英語で語ろう
国語	光源氏は、なぜ昼間ではなく夕方に垣間見を行ったのか。
家庭科	フードマイレージを計算し、あなたが不思議に思うことは何か。
保健	性感染症・エイズの予防について、あなたはどのよう行動すればよいか。
生物	夏緑樹や照葉樹を観察し、気付いたことや疑問に思ったことは何か。
公民	核兵器はなぜなくなるしないのか。
物理	閉管の基本振動数は、どのようにして変えているのか。
歴史総合	敗戦後の日本は、非軍事化・民主化を進めていたのに、なぜ再軍事化したのか。
美術	他者の作品の良い点や工夫した点はどこか、言語化しよう。
英語	SDGs の内容を四コマ漫画で分かりやすく英語で伝えるにはどう工夫したらいいか。

## ④ 生徒対象授業評価アンケートの結果

この授業改善の取組が定着した状況进行评估する「生徒対象授業評価アンケート」も実施した。

令和5年度の授業改善の重点「問いを持って授業に臨む」に深く関わる「質問5 この授業では、生徒が自分で問いを立てたり、課題を設定したりする工夫がなされている」と「質問13 この教科で、問いや疑問を持って授業に参加している」の2項目に絞って回答の傾向をみると、表3に示す通り質問5に対する回答からはどの学年でも全教科を平均して、60～70%前後の生徒が「当てはまる」か「やや当てはまる」と肯定的回答しており、自ら問いや課題を解決する工夫が授業でされていたと捉えており、教員の工夫がよく伝わっていると考えられた。質問13に対する回答からはどの学年も全教科平均して、70～80%前後の生徒が「当てはまる」か「やや当てはまる」と肯定的回答しており、問いや疑問を持ち授業に参加していると捉えており、問いが生まれる授業が実践されていると考えられた。

他に、「質問30 この教科の授業がどのような授業になることを望みますか」という項目に対する自由記述からは、全学年を通じて「分からないところを友達と教え合う」「自分の意見を言える」「ペアワークやグループワークを増やし、他の人と考える」等の意見が目立ち、生徒は、しっかり自分の問いを持ち、他者と協同しながら学ぶ授業を求めているように捉えることができた。なお「総合的な探究の時間」については、少数だが「探究で他の教科の知識を使える授業」「もっと地域のことに触れたい」と、さらに内容の充実を求める記述があった。

表3 各学年における教科ごとの授業評価アンケートに対する回答の傾向

	質問5に対する回答の傾向	質問13に対する回答の傾向
1年 (N=1,661)	70%前後の肯定的回答 30%前後が否定的回答	80%前後の肯定的回答 20%前後の否定的回答
2年 (N=1,230)	60%前後の肯定的回答 40%前後が否定的回答	70%前後の肯定的回答 30%前後の否定的回答
3年 (N=731)	60%前後の肯定的回答 40%前後が否定的回答	80%前後の肯定的回答 20%前後の否定的回答

(注)「肯定的回答」とは、質問に「当てはまる」、「やや当てはまる」と回答した割合。また、「否定的回答」は、質問に「やや当てはまらない」、「当てはまらない」と回答した割合。

### 3.3.3 全体計画及び別業作成のための研修（令和6年1月16日の放課後，M 高校大会議室）

令和5年度末には、未来会議が構想した「総合的な探究の時間」の全体計画案と別業を、関連するホームルーム及び教科・科目の実践内容とともに吟味してみる校内研修が行われた。

令和5年度は改革初年度ということであり、未来会議等として、全教職員に「総合的な探究の時間」と強く関連させながら教科・科目の授業実践を求めていなかった。しかし本研修を通して、すでに様々な教科・科目で関連させた授業実践が行われていたことが付せんで記され、未来会議によって別業に組み込まれることになった。

本研修はまず、カリキュラム・コーディネーター（兼コンソーシアム委員，兼学校運営協議会委員長，本稿共著者）が、「総合的な探究の時間」を中心とするカリキュラム・マネジメントの重要性について説明した。次に未来会議から、構想しつつある「総合的な探究の時間」の全体計画案と、ホームルームをはじめ各教科・科目の内容との関連性を明示する「別業」素案が示された。この後、既に未来会議により関連づけられたホームルームの列を参考に、全教員が自分の担当教科・科目の実践について、関連していると考えた実践の概要を付せんに書きながら交流し（図4），教科・科目の列に貼り出してみた。最後に、職員朝会や職員会議の場所でもある研修会場（大会議室）の出入りに貼り出した全体計画案及びその別業案を俯瞰したり、自分たちの付せんに貼り直したりして協議を深めていった（図5）。研修後には、貼られず机に残った付せんの記述内容も含め、未来会議が全体計画とその別業を整理しまとめあげた（本稿末の資料1，資料2）。

この全体計画と別業から筆者らが考える、本校カリキュラムと授業実践の特長は3点ある。

1点目は、第1学年「平和探究フィールドワーク」で、主な訪問先である広島市域の戦争遺構について「公共」の授業で、それらの遺構の歴史や背景を学んだり、「歴史総合」の授業で、第二次世界大戦下の人々の生活を学んだりして、戦争や当時の人々の暮らしに対する知識・理解が進み、思考も活性化してから、フィールドワークを実施できていた。

2点目は、新学習指導要領による新課程が始まった第1，第2学年の外国語科「英語コミュニケーションⅠ」，「同Ⅱ」の授業で行っていたパフォーマンステストで、総合的な探究の時間の活動を英語表現することが継続して求められていた。これにより生徒は総合的な探究の時間の学びや気づきを英語を介して他者と共有出来ていた。

3点目は、第2学年の学校行事である修学旅行と関連させた実践が、多くの教科・科目の授業で行われていた。例えば、「数学A」の単元「場合の数と確率」で、修学旅行時の宿泊部屋割りのパターンを問題演習していた。

これらの特長をふまえ筆者らは、「総合的な探究の時間」での取り組みと各教科・科目の取り組み



図4 付せんに自身の実践を書き出している様子



図5 全体計画及び別葉（案）に自身の付せんを貼り出したり、俯瞰したりしている様子

を関連させていくことが、各教科・科目の学びと実生活のつながりを見出させたり、自己の在り方生き方を日々深めさせたりできる可能性があると考えている。

未来会議では今後のこととして、令和6年度に、この実践を基盤にして、明示的に総合的な探究の時間に関連させた各教科・科目の授業実践を求め、生徒が各教科・科目固有の見方・考え方を働かせながら総合的な探究の時間に生かせる機会を増やし、一方で総合的な探究の時間での学びを各教科・科目で活用することも目指したいと考えるようになった。

### 3.4 M 高校の「探究発表会」実施とループリックづくり

#### 3.4.1 3 学年「探究発表会」（令和5年7月24日（月）午前（終業式後）、M 高校講堂）

令和5年度当初から未来会議が具体的課題としていたことには、探究した成果を発表する機会を設けることがあった。生徒たちは学級内で発表する機会はあるとしても、学級の担任と仲間以外からフィードバックを得られず、自分たちの探究を改善する機能が十分でないと考えられた。これに対して未来会議等は、先ず3学年の生徒たちが探究した成果を学校全体で共有する発表会を企画・実施した。時期としては、夏季休業前7月に行うこととなった。探究の成果を発表でき、その3年生だけでなく、1、2年生の以降の探究にもつながり効果があると考えられた。

「3学年探究発表会」と銘打った発表会は、3学年各学級の代表、8グループが探究の成果を発表し、全生徒・全教職員が参観した。発表直後には、カリキュラム・コーディネーター（筆者）が自身の人生の探究的と考える点を紹介し、発表を評価するループリック（評価基準表）を明示しながら、発表の講評を行った。発表後に生徒と教職員にアンケートを行い、成果と課題とが参加者目線で集約された。さらに、これらに対してカリキュラム・コーディネーターが探究の視点から評価を行った。

こうした取組で浮き彫りになった改善点として、「課題にさらされている当事者目線」「フィールドワーク等、課題に対して直接アプローチする経験」「根拠として挙げている情報の質」などが出てきた。

この発表会の実践と評価の結果は後日、学校運営協議会、コンソーシアム等で順次報告され、次の発表会（3月）への参加呼びかけにつながられた。

#### 3.4.2 1, 2 学年「探究発表会」（令和6年3月13日（水）午前、M 高校講堂）

「1, 2 年生探究発表会」についても、時期などが検討された。7月には、まだ探究が深まってい



ないだろう、発表は難しいだろうと考えられた。このため年度末3月まで探究させてから、発表会を行うことになった。また探究の過程は学年が進むにつれて発展すると考え、1年生では地域の魅力発信、2年生では地域の課題発見について発表させることとし、探究に取り組ませ、各学級ではグループ発表と代表グループの選出が行われ、3月の発表会を迎えた。

指導助言者には、カリキュラム・コーディネーターに加え、前述の組織（3.2.6）、運営指導委員会の委員（他県教育委員会職員）、地域協働による高校魅力化、高校生による探究活動に詳しい、一般社団法人の代表も招聘し、多角的な講評を得ることとした。

1年生は、「地域の魅力」について、高校生の目線で、食文化・スポーツ・教育・行政・交通・特産品といった観点から、探究してきた内容をクラス代表のグループが発表した。

指導助言者たちの講評からは、「他地域と比較してどう優れているのか」「自分たちで一次情報まで得ることが大切」などの改善点が挙げられた。

また2年生は、「地域の課題」について、各自が進学し学びたい学問分野の課題と関連させ探究させ、課題が広島市域にどのような悪影響（キーワードは「不」）を与えているか調査・分析したこと、発見できたりサーチクエスション、そのために3年生で行いたいフィールドワーク計画の発表をした。

発見されたりサーチクエスションとして、人文分野「被爆の記憶を継承することの意義とは何か。なぜ被爆の記憶を風化させてはいけないのか」、経済分野「広島市において都会への人口流出や少子高齢化による労働生産人口の減少は、どのような影響を及ぼすのか」等があった。

各指導助言者は、それぞれの視点・考え方で講評した。例えば「リサーチクエスションが大きい。もっと絞るべき」や「他地域での成功事例を調査するとよい」などの改善策が出た。

またカリキュラム・コーディネーターは全体講評を行い、7月に続いて、探究と「探究の過程」の意味、改善されたループリック（本稿末の資料3）、それによる全生徒の評価（「コメントカード」による相互評価）の意味とポイントが説明された。

ここには担当指導主事の他、学校が参観を呼びかけた、学校運営協議会の委員であるM団地を含む区役所の地域おこし課課長、また学校運営協議会の委員兼コンソーシアム委員であるH市M団地の公民館長と地元大学教師、そして運営指導委員会委員である大学教員など関係者の参観が得られた。

### 3.5 M高校の地域フィールドワーカー「湯来町フィールドワーカー」

#### 3.5.1 フィールドワーク実施の背景とねらい

7月と3月の「探究発表会」を節目と位置付け「総合的な探究の時間」の実践を充実させようとしてきた未来会議と拡大未来会議では、2点の課題が意識されるようになった。

1点目は、地域の魅力や地域の課題について、インターネットを中心とした情報収集に終始しているため、生徒が立てる問いが表面的で浅いこと。2点目は、発見した地域の課題を解決するため、いかに具体的に外部機関と連携したり、協働したりすればよいか分かっていないことである。

そこで、地域の魅力や地域の課題に取り組む生徒たちが、それを「自分事」として捉えつつ、外部機関と連携を円滑に、かつ積極的にできるようにするヒントを得るため、佐伯区の郊外に位置する湯来町での教師と生徒たちによるフィールドワークを企画し実施した。

#### 3.5.2 佐伯区湯来町を選択した理由

このフィールドワークは、地域の魅力や地域の課題について、生徒たちが実際に“体験”することで、

それを「自分事」と捉えられて、より深く考えるための問いが生まれるのではないかという仮説に基づいて、フィールドワークの候補地を複数挙げて（具体的には、江田島市のかき打ち体験や魚釣り体験、三次・庄原地区のサイクリング、佐伯区湯来町の多種多様な交流体験）選んだ。理由としては、佐伯区役所等の公的機関と連携できれば、今後の探究活動に活かせること、佐伯区の地域おこし課長には、探究発表会に来て頂いていたこと、学校運営協議会の委員でもあること等があった。

### 3.5.3 参加者募集

フィールドワーク参加は全校に案内をし、希望制とし、探究学習している自らの内容との関連性が意識できる時期に設定した。1年生は「総合的な探究の時間」で「地域魅力発見プロジェクト」を、2年生は同じく「地域課題発見プロジェクト」が佳境を迎えるはずの2月中旬に、Google Formsで募集した。結果として1年生5名、2年生13名、合計18名の生徒が応募した。その応募理由としては、「大学で学ぶ地域のことについて、高校で実際に地域に行ったりすることで、先にそういったことを知識として得て、推薦等で経験や感じたことを多く言えるから」等があった。

### 3.5.4 実践内容

フィールドワークの事前指導を、佐伯区役所地域起こし推進課に依頼し、同区湯来町の現状と課題を講義を頂いた。その内容を踏まえ、湯来町が独自の魅力としてPRしている体験をできるフィールドワーク先を、各生徒の関心と問題意識から選ばせ、体験交流を実施した。具体的には、「こんにゃくづくり体験」、「牧場での乳しぼり体験」(図6)、「神楽の面の絵付け」、他に牧場の牛乳で作ったジェラートを堪能する者もいた。

参加生徒への事後指導の課題は次の2つであった。

- 課題1 湯来町フィールドワークで訪問したスポットや実際に体験したことを通じて、どのような発見や気づき（例：新たな魅力、新たな課題など）を得たか、具体的に教えてください。
- 課題2 あなたがもっとも関心のある湯来町の課題を一つ以上取り上げ、今回のフィールドワークで得た新たな気づきや発見をもとに、その課題を解決するための解決策について具体的に提案してください。

特に重視した課題2について生徒は、「平日に外国人観光客が少ない。1人も外国人観光客に合わ



図6 牧場での乳しぼり体験の様子

なかった。任天堂が発売したゲームソフト『あつまれ動物の森』のなかで盛岡市の企業などが作成した「岩手再現島」のように、湯来町も取り上げたら良いのではないか。」「過去に湯来町には、マンガ『スラムダンク』の聖地として興味を持ち、足を運ぶ観光客がいたが、現在、聖地となった施設が営業していない。集客性の高いコンテンツを生み出す必要がある。そこで、湯来町の町並みや施設をイラストにしてフリー素材として配信してみてもどうか。あるいは、観光資源を取り入れたアニメーション動画を作成してはどうか」等の提案がなされた。新たな深い課題が生じていた。

### 3.6 M 高校のカリキュラム・マネジメント実践の特長と課題

#### 3.6.1 実践の特長

これまでみてきた通り同校の実践は、要となる組織（未来会議等）が教師たちと全校生徒の主体的な取組と地域社会の参画を促すよう授業研究と「総合的な探究の時間」の発表会を工夫し実践し、授業改善と発表会（特に評価）の改善を図っていた。また探究させることを基本に据えて校内研修を積み、自校生徒に育てたい資質・能力像を探り出し見直したり、「総合的な探究の時間」と教科等を関連付ける具体的な工夫や指導計画（「総合的な探究の時間」の全体計画とその別業）について吟味したりしていた。さらに協力を得たい地域社会や専門家に取組を組織化し、自校の実践を開き評価を得ながら、さらなる必要と考える具体的な協力を得ていた。

これらの実践の中心には、求められているカリキュラム・マネジメントの3側面を実現するだけでなく、自校と生徒のための責任と意欲を持って改善・開発をするという、まさに同校の教師たちによる探究的な営みがあったと考えられる。また、探究的な教師たちの実践が進むために、未来会議とそのメンバーによる責任と意欲による工夫や努力が続けられていたことがあったとも考えられる。さらに諸会議を通して寄り添った担当指導主事の指導・支援や、これらに呼応しようとするカリキュラム・コーディネーターの客観的な支援にも意味があったと考えられる。

#### 3.6.2 実践の課題

ではこの「総合的な探究の時間」を生かした探究的な実践に残されている課題は何か。先ず探究のよさ、カリキュラムづくり、授業づくりのよさを味わい、生徒と教師が意欲と責任を高めることがあると考えられる。次に探究をもとに、より効果的なカリキュラムづくりが進むこと。さらに結果として高校現場と教師たちのカリキュラムづくり、授業づくりの力が高まること等が考えられよう。

## 4. おわりに一高校のカリキュラム・マネジメント実践の視点と方法一

### 4.1 実践的な視点と方法

本稿は、高校のカリキュラム・マネジメントをよく実践するための視点と方法を明らかにするため、筆者らが参画してきたM高校（全日制普通科）の「総合的な探究の時間」を生かした授業及びカリキュラム改善・開発の実践を吟味してきた。これを通して明らかに出来たことは次の点である。

高校のカリキュラム・マネジメント実践に求められる視点と方法として、その授業及びカリキュラム改善が探究的に進められることが考えられる。すなわち教師たち自らが授業及びカリキュラムの改善・開発を連続してゆくことであり、これをよく開きながら全校的に行うことである。これは授業づくりの本質へとつながっていく。生徒達の探究的な学びをすすめる教師たちも、また探究的に授業・カリキュラム改善することが重要になると考えられるのである。

## 4.2 具体的な課題

この実践的な視点と方法が抱える具体的な課題として、全校的に探究の意味とよさを味わい共有化し、生徒も教師も探究的な学びに対する意欲と責任を高めていく機会を工夫することが考えられる。

全校をあげて、いかに探究するとよい（例えば楽しい）のか、なぜ探究させないといけないのかを考え、まとめあげていくには、「総合的な探究の時間」を要（かなめ）として生かし、開かれたカリキュラムづくりを進めることであり、そのための評価や振り返りの機会を工夫することであろう（M高校の場合、「総合的な探究の時間」と教科等の取組を関連させた指導計画を改善しながら自校の魅力化、学科改編に取り組んでいた）。このために教師たちが、「総合的な学習の時間」など自分たちの授業やカリキュラムを工夫改善してみて、生徒発表の評価や生徒からの授業評価を通し、手応えを掴めるよう授業研究及び授業評価の機会（M高校の場合は「授業観察月間」や「生徒対象授業評価アンケート」）を工夫することが重要となろう。こうした工夫をする柔軟な組織（M高校の場合は「未来会議」）が設定されたり、それによる的を射た校内研修が実施されたりすることで、教師たちの探究的な授業とカリキュラム改善への意欲など意識が高まり共有化されていくことが考えられる。

次に生徒には、教師の指導のもとでよく探究活動を進め、それに対する適切で多面的・多角的な評価を得ながら振り返り、探究の意欲を高められるよう、探究する授業時間の確保や組織的で開かれた発表会と評価（M高校の場合、「探究発表会」とループリック）の機会を創ることである。

さらに、これらを通して自校にとってより効果的と考えられる全体計画やその別業などを開発してゆくための校内研修（M高校の場合は「全体計画及び別業作成のための研修」）も肝要と考える。

他に、こうした教師たちによる探究的なカリキュラムづくりを俯瞰しながら、継続して指導・助言するようなコーディネーターや指導主事が位置づくことも意味があろう。

なお、こうした実践的な課題に対し、各高校との実践の共有化を進めてゆくことも期待される。

謝辞：本研究実践を進めていくにあたり、広島市立美鈴が丘高等学校の前校長である柳義信先生と現校長の合田和広先生には、あたたかく励まして頂いてきた。記して感謝申し上げたい。

## 引用文献・参考文献

- 川喜田二郎著『発想法 創造性開発のために』中公新書、1967年、pp. 194-196。
- 佐藤浩章編著『高校教員のための探究学習入門』ナカニシヤ出版、2021年、pp. 9-16, 33-36, 104-105。
- 胤森裕暢「第4章 『総合的な探究の時間』（高等学校）の構成—教育課程における考え方や位置付け等、学習指導要領を基礎として—」朝倉淳・永田忠通共編著『総合的な学習の時間・総合的な探究の時間の新展開』学術図書、2019年、pp. 39-53。
- 胤森裕暢「カリキュラム・マネジメントを充実させる校内研修—研究授業を通したループリックづくりを中心に—」『広島経済大学研究論集』第43巻第1号、2020年、pp. 15-24。
- 胤森裕暢・川口健史「教師による授業づくりのための対話的な研究協議会の改善—広島市教育センター『子どもの学習意欲を高める授業探究研修』の実践を通して—」『広島経済大学研究論集』第45巻第3号、2023年、pp. 1-13。
- 胤森裕暢「全国コミュニティ・スクール in 金沢 分科会① 持続発展、教育課程 発表資料」、2024年11月8日、<https://www4.city.kanagawa.lg.jp> (2025.2.19確認済)。
- 田村知子著『カリキュラム・マネジメントの理論と実践』日本標準、2022年、pp. 3, 24-31, 34。
- 田村学、佐藤真久編著『探究モードへの挑戦—高度化・自律化をめざす SDGs 時代の人づくり—』人言洞、2022年、pp. 45-46。
- 八田幸恵、渡邊久暢著『高等学校観点別評価入門』学事出版、2023年、pp. 25-26, 125, 130, 147。
- 広島市立美鈴が丘高等学校『令和5年度「新時代に対応した高等学校改革推進事業」第1年次 研究開発実施報告書』、2024年3月。
- 文部科学省『高等学校学習指導要領（平成30年告示）解説 総合的な探究の時間編』学校図書、平成31年。
- 文部科学省『今、求められる力が高める総合的な探究の時間の展開』株式会社アイフィス、2023年、pp. 68-111。




資料1 M 高校の校内研修会を通してまとめられた「総合的な探究の時間」全体計画

令和5年度 総合的な探究の時間 全体計画				
学校教育目標				
校訓「進取 友愛 節度」のもと、高い志を持ち、変化の激しい社会において、自らの未来を切り拓き、「地域共生社会」の創り手となる人材を育成する。				
学校教育目標に基づいた育てたい生徒像				
『国際平和文化都市『広島』をフィールドとした学びにより地域社会の発展に貢献し続ける人物』				
生徒の願い	育てたい9つの資質・能力（9C）			地域の願い
○自分たちの考えや想いを表現して生き生きと主体的に学習したい ○自身や身近な地域の課題を見出し解決する学習は面白い	主要3分野	9つの資質・能力		○自分たちの課題を大切にしてほしい ○地域は生徒の学びに協力したいので情報に来てほしい
	地域や社会の課題を見出す力	・情報収集力（①） ・自分力（④） ・協同して課題を解決する力	・情報分析力（②） ・思考力（⑤） ・調整力（⑦） ・選択力（⑧） ・発信力（③） ・行動力（⑥） ・実践力（⑨）	
総合的な探究の時間の目標				
(1) 探究の過程において、課題の発見と解決に必要な知識及び技能を身に付け、課題に関わる概念を形成し、探究の意義や価値を理解できるようにする。 (2) 実社会や家庭生活と自己との関わりから問いを見だし、自分で課題を立て、情報を集め、整理・分析して、まとめ・表現することができるようにする。 (3) 探究に主体的・協働的に取り組むとともに、互いの力を生かしながら、新たな価値を創造し、よりよい社会を実現しようとする態度を養う。				
各学年の学習内容				
自分の【好き】を究め、社会に貢献する美高生！				
学年	第1学年	第2学年	第3学年	
単位数	必修1単位	必修1単位	必修1単位	
学年テーマ	『地域社会×自分』	『現実社会×自分』	『未来社会×自分』	
	【自己理解を深める】	【他者と協働する】	【人生を探究的に振り返る】	
	【探究基礎力をつける】	【探究基礎力を探究へ活かす】	【探究を進め、未来へ継承する】	
	【興味関心から探究する】	【興味関心を進路探究へつなげる】	【進路探究を進路実現に役立てる】	
	【地域の魅力を発見する】	【地域の課題を発見し分析する】	【地域の課題解決に貢献する】	
年次目標	・探究の基盤となる自己理解を深め、探究的な思考や探究の基本型を活用することできる。 ・自分の興味関心のあるトピックを探究的な思考で分析し、自分なりに考察することができる。 ・自分の住む広島市について学び、その魅力に気づき、他者に発信することができる。	・実際の社会課題を見つけていながら、その課題を現状がより良くなるように解決できる。 ・1年時に学んだ探究の基礎を活用して思考を深めることができる。 ・他者と関わり合いながら探究を行うことができる。	・探究発表会を目標として実際に地域や他者に還元し、課題解決のために行動できる。 ・他者に対して、これまでの探究とその過程を自分の言葉で語るすることができる。 ・新たな問いをもち、今後のキャリアにつなげることができる。	
具体的な学習内容と学習活動	<b>キャリア探究Ⅰ（9C:①②③）</b> 【好き】探究プロジェクト ◎探究の型を学び、自分の興味関心を深めて、探究的な思考で探めていく。このプロジェクトを通して、探究の型を身につけ、探究の楽しさを実感する。  <b>平和探究Ⅰ（9C:①②③④）</b> 平和探究講演会Ⅰ 平和探究フィールドワーク①戦争によって変わった人々の望みや破壊の実相を各々が問いを持ち、自律的に平和について探究していく。  <b>地域探究Ⅰ（9C:①②③④）</b> 地域魅力発信プロジェクト/地域探究発表Ⅰ ◎自分たちが住む広島市について、様々な角度から学び、広島市の魅力について理解を深め、その魅力を他者に発信する。また、その過程で気づいた課題についても考える。	<b>キャリア探究Ⅱ（9C:①②③）</b> 修学旅行プロジェクト ◎修学旅行を題材として東京での進路別フィールドワークで希望進路の最先端の状況を知り、地域においてそれがどのように生かせるかを考えた上で自身のキャリアイメージを具体化し、進路実現に向けた意欲を高める。  <b>平和探究Ⅱ（9C:①②③④）</b> 平和探究講演会Ⅱ 平和について研究している専門家の話を聞くことで、自身の平和観を深化させる。1年次の平和探究Ⅰにさらに知識や思考を積み重ねる。  <b>地域探究Ⅱ（9C:①②③④）</b> 地域課題発見プロジェクト/地域探究発表Ⅱ ◎1年次に見つけた課題や、修学旅行での学びを軸にして、希望進路とその分野が抱える地域課題を見つめる。その課題をどのように解決することができるのか道筋を立てる。	<b>キャリア探究Ⅲ（9C:①②③④）</b> マイヒストリープロジェクト ◎授業や総合的な探究の時間を含んだ高校3年間を振り返り、これまでの自分の在り方・生き方を見つめ直す。その上で、今後の人生において自分はどう生きていくかを前向きに考える。  <b>平和探究Ⅲ（9C:①②③④）</b> 平和探究講演会Ⅲ 平和について研究している専門家の話を聞くことで、自身の平和観を深化させる。2年次の平和探究Ⅱにさらに知識や思考を積み重ねる。  <b>地域探究Ⅲ（9C:①②③④）</b> 地域課題解決プロジェクト/地域探究発表Ⅲ ◎2年次に見つけた広島市の抱える課題を解決するための道筋を軸として、実行に移した上で一連の課題解決の過程を他者に説明する。また、今後につなげる新たな問いを見つける。	
関連行事	・平和探究講演会：各学年の3年間の探究の過程に位置づけ、自分の平和観を確かめ広げていく手がかかりを得る。 ・探究成果発表会：学校・地域関係者にも参加してフィードバックをもらうことで、探究の次のステップへとつなげる。			
評価方法	ルーブリック評価+探究成果発表会での専門家や地域の方々による評価+民間ツール等による資質・能力評価			
教科・科目等との関連	指導方法	指導体制	学習の評価	外部連携
・生徒の「問い」から始まり、「社会につながる課題」を設定する。 ・上記に基づいた個人思考と協同学習で学ぶ探究的な授業を全教科で実施する。	・探究分野別などの学年を超えた縦割りを活用する。 ・ワークショップ形式など生徒が楽しみながら主体的に参加する形式を取り入れる。	・探究発表会等を通じて専門家等から意見をもらい、各学年の担当が適宜指導の計画や指導方法を適宜見直ししていく。 ・TTを活用して、生徒の探究へのフィードバックをきめ細かく行う。	・9つの資質・能力に基づいたルーブリックを発表会等で活用する。 ・探究発表会等で学校全体の探究学習の取組について内申から評価を受ける。	・コーディネーターを通して保護者やCS、外部機関（大学、公民館、市役所等）と連携する。また必要に応じて外部から専門家を招き、アドバイスを講演会等を実施してもらう。

資料2 M 高校の校内研修会を通してまとめられた「総合的な探究の時間」の全体計画の別葉（一部）

令和5年度 総合的な探究の時間 別葉(LHR、関連する教科・科目等の内容)					
月	日	曜日	1学年	LHR	関連する教科・科目等
9	7	木	第7、8回スタサブ(興味探究⑧⑨⑩) 夏季休業中の探究内容の整理・分析・まとめ・表現	進路講演会	数学Ⅰ(データの分析) データを表やグラフに整理すること
	14	木	大学訪問(山口大学)	大学訪問(山口大学)	
	21	木	第9、10回スタサブ(興味探究⑪⑫) まとめ・表現クラス	スタサブ到達度テスト活用	
	28	木	【好き】探究発表会(グループ内)	自主	
10	5	木	中間考査	中間考査	・英コミⅠパフォーマンステスト わたしの平和宣言をスピーチしよう ・数学A(場合の数と確率) ディズニーランドorシー ・数学A(場合の数と確率) 修学旅行部屋割り
	12	木	平和探究① 平和探究講演会	薬物乱用防止教室	
	19	木	平和探究② 訪問計画	体育祭準備	
	26	木	市立公開研究授業	教科登録	
11	2	木	平和探究③ 問いを立てる	自主	公共 広島の戦争遺構について 英コミⅠパフォーマンステスト わたしの平和宣言をスピーチしよう 歴史総合 第二次世界大戦下の暮らし
	9	木	平和FW	平和探究フィールドワーク	
	16	木	平和探究⑤ ポスターメイキング	小論文ガイダンス	
	23	火	平和探究⑥ ポスターメイキング	自主	
	30	木	期末考査	なし	
12	7	木	地域探究①オリエンテーション(探究講話・冬課題の提示)	進路希望調査	
	14	木	地域探究②課題設定	入試の仕組みと入試科目調査	
	21	木	午前授業	なし	
1	11	木	地域探究③ 課題の設定・調査	小論文の書き方	音楽Ⅰ「郷土の民謡と芸能 広島県の民謡、芸能を存続する難しさと意味について、考察・プレゼン発表
	18	木	地域探究④ 課題の設定・調査	自主	
	25	木	地域探究⑤ まとめ・表現	合唱祭練習	
2	1	木	地域探究⑥ まとめ・表現	合唱祭練習	
	8	木	地域探究⑦ クラス発表 最優秀者は発表会へ	合唱祭練習	
	15	木	地域探究⑧ クラス発表 最優秀者は発表会へ	スタサブ小論文講座	
	22	木	キャリア探究講演会 【ドラゴンプライズ浦社長講演会】	教科書販売説明	
	29	木	選抜		
3	7	木	テスト返却特別時間割		


資料3 M 高校の1, 2 年生「総探発表会」(令和6年3月)のために改善されたルーブリック



令和6年3月13日

探究発表会

評価の基準表 (ルーブリック)



**A 地域住民や広島市民の暮らしにも役立つ課題を設定し**  
**A 地域住民等にも相談し、様々な側面や立場からよく考えた答えや新課題を**  
**A 元気に、分かりやすい表現の仕方、発表できている。**

**B 他の生徒の生活にも役立つ課題を設定し**  
**教職員にも相談しながら、細かくていいねに考えた答えや新しい課題を**  
**元気に、はっきりした口調で、発表できている。**

**C 自分の興味に基づく適切な課題を設定し【地域や社会の課題を見い出す力 課題設定】**  
**仲間に相談して考えた答えや新しい課題を【共同して課題を解決する力 取組状況】**  
**元気に、発表できている。【正解のない課題に向き合い続ける力 発表態度】**

